

平成 19 年度 「聴覚障害児支援夏季研修会青森大会」講演の記録

難聴者として生きる～「隠し続けた心」の開放～

NPO みやぎ・仙台中途失聴難聴者協会 副理事長

村田 哲彦 氏

～はじめに～

今、ご紹介いただきました、村田と言います。今日はお招きいただきまして、ありがとうございます。青年部長なのですが、ちょっと年のいった青年部長です。今年の春からは、社団法人全日本難聴者・中途失聴難聴者連合会の青年部長もやることになりまして、最初で最後の青年部長だろうなと思っております。

私は、中等度難聴です。中等度難聴とは、身体障害者手帳に非該当、手帳を持っておりません。そんな私がこんな所でお話して良いのだろうかと言うような気持ちもあります。今まで聾者や重度の難聴者の方とたくさん関わってきて、そういった中で入った曖昧な部分の立場というものがある、自分の体験や経験をこんなに人に話すものなのかなと、そういう気持ちが正直すごく強いです。それが近年早期発見と言うことで、一人一人の幼い子ども達が、たくさん聴覚障害の子ども達が発見されて、そして聴力レベルも様々な中で、自分自身のようなどちらかというあまり明るいとは言えなかった、そういう子ども達が少しでも減ってくれると良いなど。ただそれが、自分の性格だったのか、それとも少し聞こえにくいことに起因しているのか、というのは当然私にも分かりません。その辺を皆さんに判断しながら聞いていただくほかはないのかなと思っています。よろしくお願ひします。

私が、難聴協会に入会したのは3年前です。難聴者の世界の中では、新参者です。手帳も持っていない。それより前までは、宮城県に手話サークル連絡協議会というものがありまして、そちらの方でしばらく活動して、会長とか勤めていました。東北の地域には、東北手話サークル連絡協議会というものがありまして、そちらの方で青森に何回かおじゃましたことがあるので、こちらの手話通訳さんとは実は顔を覚えているのですが。それで、自分自身はそれまでは健聴者と言う立場から主に聾者の方々と関わる、いろんな事でバックアップしていくということがありました。自分自身も手話通訳の勉強をしたことがありまして、通訳者の試験を受けようかなと思ったこともあったのですが、聞き取りの試験がだめで、読み取り専門で地元では通訳を裏の方でやったりしています。そういった自分自身が、なぜ突然聴覚障害者の活動の世界では難聴協会はどちらかというマイナーな方なんですね。ご存じのように、全日本聾啞連盟、聾啞協会というのは非常に大きくて古くて力もあって、そういった世界から難聴者の世界に飛び込んでいって、その中で活動を始めていくときにも、やはり自分の中でもいろんな葛藤、アイデンティティの変化というものがありました。少し聞こえにくいというレベルなんだ、という気持ちでその世界で関わってきて、そういう少し聞こえにくいだけの自分に何ができるのかな、そういう立場の自分が発言すべきなのかなと、そういった気持ちを持ちながら活動してきましたけれども、今自分の中でやはり聴覚、聴力のレベルには、重い人には重い人なりの苦勞、困難さというものがあり、軽くて軽い人なりの苦勞、困難さがあるんじゃないのかな、そういったことを少しでも自分が周りの方にお話しすることで、何かのお役に立てたらなという気持ちにようやく変わってきつつあります。

(スライド) これは、私が16歳の時の聴力検査の結果なのですが、だいたいお分かりの方だと、結

構悪いんじゃないのと思ったりします。2000 ヘルツのあたりが0 デシベルなので、音としてはほとんど入っていきます。ところが、500 ヘルツのあたりが30 デシベル、そして4000 ヘルツのあたりが60 デシベルというふうに、非常に珍しい山型のカーブになります。このころ大学病院に通っていましたが、医者から補聴器を進められることもなく、「あなたは大丈夫だ、頑張りなさい」と、むしろ今残っている2000 ヘルツのこの部分を大切にされた方がいいということで、特になんの支援を受けることもなく聴覚障害者の世界、あるいは手話、そういった世界に全く触れることなく、30歳まで生きてきました。初めて大学病院に行ったのが確か4歳の頃だったと思うのですが、自分がなんで大きな病院に行ってこんな検査をしなければならないのか、当然分からなかった。自分自身が聞こえない、聞こえにくいということの意識もすごく少なかったと思います。

(スライド) 次が、ちょっと最近の、2年前の検査結果なのですが、2000 ヘルツの良かった部分がちょっと落ちてきて、15 デシベルぐらい。それから、500 ヘルツのあたりが50 デシベルぐらい、4000 ヘルツのあたりが70、80 デシベル。左の方はこういう感じでスケールアウトしています。こういった中で、加齢によるものかどうかは分かりませんが、職場でもだいぶ苦労しています。特に東北地方の方はご存じだと思うのですが、わりあい口の動きがはっきりしなくて、曖昧なもごもごとした喋り方をする人が多い。また、2000 ヘルツというと、比較的女性の声に相当しますね。ですので、女性の声は聞きやすく、女性と話すのは大好きなんです。女性の声が好きなんです。ところが男性、特に年輩の職場でも重要なポストの人たちというのは、(スライド) だいたいこの辺だと思うのですが、非常に聞こえない。だから、重要な上司の声が聞こえなくて、若い女性の声が聞こえるということで、変なやつだと思われるようです。私自身も補聴器を使うようになったのが、このころなんです。この聴力検査結果というのは、今使っているデジタル補聴器を買うためにとってきたのです。それまでは、アナログが主流でしたので、2回使ったのですが、このように急カーブを描く山だと、ほとんど使い物にならなかった。なので、なんの支援もなく、なんの知識もなく、つい最近まで過ごしてきたのが私の道のりです。

## 1 幼少時の記憶 ~両親からの影響と私の心~

(スライド) これ、私なんです、生まれた時ってみんなかわいいですよ。ありがとうございます。こういう私でもこういうかわいい時代があって、両親に愛された時代があったなと、アルバムを見ながら思ったのですが、でも、両親に愛されていた時代というのは、本当に記憶の中ではほんの一瞬なんです。むしろ、その後両親との間にいろんな争い、あるいは自分が聞こえないということを理解してもらえていないんじゃないか、あるいは分かっていた上で社会で生きていけるようにといろいろ配慮してくれていたのかもしれませんが、でもそれが自分にとっては、ストレスで仕方ない、両親が自分のことを愛してくれているとは思えない、そういう人生の出発というものが自分の中で、その後の人生を綴っていく上ですごく大きな影を…、いるのかな…。今思い出してみると、幼稚園の頃だったか、小学校1年の頃だったか、東京まで6時間ぐらい特急列車に乗って夏休みに行きまして、鍼をうったんです。それが痛くてね。小さい子どもがなんで自分の頭に鍼を全面にうたれるのかという理由が分からないんです。鍼をうっただけでなく、鍼の先端にはお灸を、ヨモギをくっつけてあちこちで煙が上がっている、

頭に鍼をうたれて煙がもわもわとなつて、30分が1時間くらいじっとしていた記憶があるのですが、なんでせっかく楽しい都会に出てきたのに、毎日毎日こんなふうに通わなければ行けないのかなと思ひながら、今思うと両親としては本当に効果があると思つたのか、何かにすがりたいという気持ちだったのかということ、今なら分かる気がします。当然その頃は、なんでこんなことをするんだろう、でもこの後アイスクリーム買ってくれるし、おいしいもの食べに連れて行ってもらえるから、ちょっとの間頑張つて、くらいにしか思つてなかつたんですね。あとは、音楽教室に通わされたのですが、自分よりちょっと年下の女の子ばかりが同級生で、みんなで一緒に歌つたりオルガン弾いたりするんですが、なんでこんな所に年上の男の僕が習いに來てるんだ、という気持ちも出てきて、両親としては少しでもそうやって音を耳に入れていく環境を、音や音楽にいかに関心であるとか、あるいは聞き取りに少しでも役立てたら、たぶんそういう気持ちだったと思ひます。でも、そういう両親のしてくれたことというのが、全部が全部自分にとっては余計なことでした。

大学病院に通つたわけですが、大学病院から歸つてくる時に、両親が「分からなかつたら何回でもいいから聞くんだよ」というふうに繰り返して繰り返して何度も言つた。そういえばなんか、ちょっと喋つてゐることで聞こえないことがあるなと思つて、ときどき聞くんですね。「あれ？なに？なんて言つたの？もう一回、もう一回」と聞くんです。最初は答えてくれても、それが毎日毎日、一日の中で10回も20回もなつてくると、両親はやつてくれなくなりまふね。それは、健聴者の子どもであっても、何か疑問が出た時に、「これって何？これって何？」としつこく聞くと嫌がられるので、同じ事だと思ひますが、私の場合はそれに輪をかけて「今なんて言つたの？」というふうに、両親が何回も聞きなさいと言つたわけですから、その通りに私は聞いたんです。そうすると両親は、当然「あとでね」「子どもには関係のない話だから」「もういいから、もういいから」とついつい言つてしまふ。でもそれが、本当に今でも自分の心に残つてゐる、実は非常に大きな・・・のように長い間長い間ささつてゐる。そしてそれが、両親だけでなくやがて周りの友だち、あるいは学校の先生、そして大きくなつていくと職場、といったさまざまな場所で、1回2回くらいは聞いてもいいかなつと、それ以上聞いてもだめだったらあきらめちゃう。たぶん同じ難聴の子どもたちはみんな同じ経験をしてゐるんじゃないかなと。だったらそんなこと言うなよ、と言いたくなるのですが、でも両親からするとそれ以外になにも他に方法がなかつたのかなと、言いようがなかつたのかなと、今だったら分かるんですよね。そして、私がちょうど幼稚園、小学校の頃でしたか、カラーテレビになつた時代があつたんです。我が家にカラーテレビが入つてきてすごく嬉しくて、その頃はウルトラマンとか仮面ライダーとかがはやつた時代で、テレビの真ん前を占領してボリュームを上げて見ていたのですが、いつもいつも「テレビの音がうるさい、もっと静かにしなさい、もっと離れて見なさい」と言われて、どこのお宅でもそうだと思ひますが、とにかく何か耳のことにまつると自分が四六時中ストレスを感じなさいいけない、そんな気持ちがちょっとずつ積もり重なつていたんだなあ。だから、しつこく聞くと嫌われる、多くの難聴の方と話しますが、健聴者の集団に入つていけば後はくつついていだけ、何も言わないでくつついていくのが難聴者、というくらいに似たような行動パターンで・・・。自分が我慢をすればまるくおさまるのかな、そうやって少しずつ消極的な受動的な受け身の自分の性格が後天的に作られていったのではと思ひます。専門家じゃないのでわからないのですが。

それが、何のサポートも受けてこなかった私にとっては、聞こえる人間として、見せかけは聞こえる人間として生きるという、なんか他のことすべてに、熱い鉄を融かして鋳型に流し込んで型を作るような、そういう自分自身の中途半端な難聴者といえますか、そういった、聞こえる立場の、見せかけ聞こえる人間としての生き方・性格で、人生をただ作ってきたのかなあと思います。

## 2 学校での記憶 ~教師や友人からの影響と私の心~

ここから、学校の時の話に入っていくのですが、教師、あるいは友人といったものが、自分の心にどんな影響を投げかけていたんだろうということをちょっと振り返ってみます。

私が(思い)浮かぶ所といえば、幼稚園とか小学校というのは、昔はみんな声が大きかったんですね。意味もなく、「わかりましたか?」「ハーイ!!!」というような感じで、とにかくわけもなく声が大きかった。そういう環境の中では、難聴のストレスもたぶん無かった。それが、なんかふっと気がつくと、『あれ?クラスのみんないないなあ』と言うことに気が付いて、探してみたら、あれ、今日は校舎の外にみんな出てるなあ、とか。すごく悔しかったのは、小学校の6年生の時のタイムカプセルです。卒業する時に、なにか自分の記念になるものを、みんなで集まって校庭に穴を掘って埋めて、「じゃあ、20年後、30年後、みんなで集まってこれを掘り出そうな!」という、タイムカプセル。そのタイムカプセルを埋めるということを、私は一切知らなかった。そんなに学校休んでいたわけでもないし、何で知らなかったのか自分でも全然わかりませんが。ある日、みんな校庭に出て行くのでくっついていたら、校庭の片隅に穴が掘ってあって、みんなが、玩具だとかいろいろ持っているんですね。それで「どうしたの?」ってきいたら、「バーカ、おまえ、今日タイムカプセルの日じゃないか!おまえ、なんか持ってきたのか?」と言われて、何も準備してないけど...って思ったんです。たぶん、こんな楽しいこと、こんな大事なことって、友達同士の話の中にもきっとあった筈なんですよ。先生が「何か持って来なさい」と言うだけじゃなくて、必ずそこかしこでそういう雑談があったはずなんです。でも、そういう情報も自分には届いていなかったんだということに、20年、30年たって気がつきました。その時には、なんで自分の知らない動きがこんなにいっぱいあるんだろう、というくらいにしか思っていませんでした。

ある程度大きくなってくると、委員会活動とかありますね。自分は小中高と、図書委員会だけはずっとまじめにやってまして、かならず副委員長です。なぜ委員長をやらないかという、(委員長は)生徒会の総会なんかで壇上に上がってやりとりしなくてはならない。あそこに行くとやっぱり質問が聞こえないので、ちょっと俺には無理だなあという気持だったんですね。思い出してみるとクラブ活動とかいるんな活動をやった時に、自分はいつも『副』ばかりやってた。なにか無意識のうちに自分が矢面に立たなくてもよい場所を選んでる。でもなにかやりたくて、何か動きをしたくて、手を上げる時には『副』ばかりだったんだなあって、気がつきました。

そして、中学校に入ると、なぜかみんなの声が低くなって来るんですね。友達の声だけじゃなくて先生達の声も段々低くなって来る。その頃に、思春期ということもあってか、自分自身はだいが耳が悪いらしいということに気がついたんです。音声としては入ってくるんだけど、肝心な部分、例えば語尾とかが過去形だったり否定形だったりすることで意味が変化してしまいますよね。また、数字だった

り、人の名前だったり、大事な単語がぼやけてしまう。虫食いだらけの地図を眺めているような感じで授業が当然わからない。わからないだけだったら、くやしいから家に帰って勉強すればいいんですけど、どうしても目立ってしまうのが音楽、それから英語の授業なんです。音楽の授業では合唱、歌があります。先ほどの山なりの（聴力の）グラフを思い出していただければわかるんですけど、自分で一定の音が取れない。ある特定の聞こえやすい音はたぶん取れてると思うんですけど、ちょっと低音だったり高音だったりすると音が取れない。なので、自分は音痴だと自覚してない音痴だったんです。私がいたクラスは、毎年、合唱コンクールの時異様に盛り上がって、学年優勝だったり全校優勝などするクラスだったんです。だから、歌が下手だった私に友人が放課後付き合ってくれて、歌の特訓をしてくれたんです。その歌の特訓を始めた頃は、自分では歌が下手だとは思っていなかった。ところが友人の歌に合わせて歌おうとすると妙にハモってしまう。妙にずれてしまう。何回やってもずれてしまう。そのうちに自分のプライドっていうんですか、雰囲気は凍って、その友達と殴り合いの喧嘩をしてしまいました。それが中学校1年生の時だったのですが、その友人とはそれから3年間、絶交状態で卒業してしまいました。

今でも職場でカラオケ行こうということになると、付き合うことは付き合うんですが、絶対歌わない。でも歌は好きなので、難聴協会に行くともうマイクを離さないくらい歌っちゃうんですね。

そして、英語の授業。英語の先生って言うのがとにかく声が低い先生で、それだけでも耐え切れない。ですから、私の嫌いな先生の順位っていうのは、だいたい声の低い順番なんです。あるとき発音で『tomorrow : 明日』が発音できなくて…。この単語は今だに発音したくないです。みんなの前で10回20回と言わせられたんです。それでいくら言っても合わないんで、ちょっと変化させたりするんです。「トメロウ」とか「トモロウ」とか…何回やってもわからない。クラスみんなも笑ってしまうんですけど、心の中ではものすごい土砂降りの雨と稲光がしてた。一応顔では取り繕って笑いを浮かべているんですけど心の中はものすごい嵐でした。それから英語の勉強は本当に大嫌いになりました。そのうち授業のほとんどがわからなくなりました。とりわけ声がでかい先生が一人二人いたんですが、その先生以外の授業は段々わからなくなりました。前から2、3番目の席の時もあったんですが、音としては入ってきててもことばとして完全につかめない。そうなってくると、プライドだけは高くなって行って、『聞こえないんじゃない、聞いていなかったんだ』と言い訳をする。授業中は、よく右側から順番にあてるとか、先生が生徒を指名していきます。この並びだと何番目くらいに自分に来るなあとになると、眠りの態勢に入って、「村田、村田！」って呼ばれてから、「あ、すみません、寝てました！」という感じで授業のほとんどを寝た振りをしてすごしてました。ひねくれてますね。

小学校のころからかなり聞き漏らしというのはあったのでしょうけれども、自分自身ではそれほど認識はできなかった。だから回りに人がいないとか、何かを持ってこなければいけなかったとか、そういうことでもない限り気付くことは無かった。でも中学校くらいになってからは、記憶というものが辛いもの、苦しいものがある。そして、聞こえないことは恥ずかしいことであると思うようになりました。そのことは絶対に覚られてはならないことだと思うようになりました。何故だかわからないけど、そういうふうになるようになったんです。そして、プライドを刺激されるということ、すごく極端に恐れるようになりました。自分の耳のことに触れたり、なにかそういう教育なりになってくると排除しました。学校の先生も声が低く、生徒を指名して解答させる先生というのは私にとっては……。そのうちに、

誰も彼もが自分の耳のことを言ってるような気がしてきて、意味もなく睨みつけて、相手を威嚇して『おまえなんか俺の気持がわかってたまるか。』いつもいつも、そんなことばかり考えていました。そして段々、自分の顔から表情が消えていったんです。鏡を見るのもいやでしたね。この頃の写真を見たら、本当に顔の筋肉が無いような、のっぺりとした顔なんです。こんなのが目の前にいたら絶対友達になってはいないかと、我がことながら思ってしまいました。

### 3 社会に出て ~職場でのかわりと私の心~

突然、10年くらい時をおいて、ちょうど就職をしたころというか、仕事が決まって初めてスーツを着た時の写真です。(スライド)この私でも一応公務員になりまして、なんとか食いつぶされることのないという状況になりました。ただ、面接に行く朝に、うちのお袋が「耳のことはだまっておくのよ。」と言いました。なんの抵抗もなく、ああ、そうだなと思いました。もちろん、履歴書にもなんにも書いていないですし、障害者手帳を持っていませんから書くほどでもない。ただ、面接の時に聞こえなかったらどうしよう、聞こえなかったら終わりだな、その時はなんとかごまかせるかな~と。そう思いながら、面接会場に着きました。幸いにも、たまたま声の大きい面接官だったので、無事に元気よく「ハイ！」と答えて、ごまかして滑り込みました。今日職場の誰かがいたらやばい発言なんですけど。

でも、初出勤で敢え無くばれてしまうんです。席に着いて「村田君」と呼ばれると気がつかない。上司というのはたいてい自分の席に座ったまま、離れた席の自分の部下を呼びつける。そうすると全然わからないわけです。初日から「君、耳が悪いんじゃないか？」と言われました。「はあ、そうみたいですね。なんか最近耳の調子がおかしくて~」というところから、私の仕事が始まりました。

私の聴力は先ほどのグラフにありましたように、いい部分は右だけなんです。左は最初からぐっと下がっていますので、一側性難聴でもあります。ですから、どこから呼ばれた時に、方向がどっちかというのがわからない。後ろから呼ばれたのに前の方をきょろきょろ探したり、左から呼ばれたのを右の方を探したりするから、よほどおもしろかったようで、職場の人にも結構からかわれることになっちゃうんですけども、そうなる僕のパライド面というのが刺激されてしまうんですね。

補聴器を買うようにと言われたんですが、今まで補聴器をすすめられたことがなかったですし、補聴器を使うという発想もありませんでした。なのでとりあえず5月の連休に実家に帰って、病院の先生に連絡を取って、補聴器を使わなきゃいけないらしいという話を両親にして、そして、医者に行ったわけなんです。右の良い部分の聴神経の細胞が少ないらしいのですね。だから非常に強い音が入るとダメージを受けてしまうので、左の方に補聴器をつけるといいですよと医者からアドバイスを受け、左につけることになりました。当時はアナログ補聴器で耳掛け式だったのですが、第一に耳掛け式補聴器が似合っていない(???)。それとボリュームは上がったのだけれどもやっぱり聞きとれない、ということで耳掛け式補聴器を断念しました~というか捨てちゃいました。それから数年して、やっぱりダメだなあと思ひまして、今度は耳穴式補聴器で目立たないのを買ったのですがやっぱりアナログでして、結局はそれも使わなくなってしまいました。

両親から、「頑張って、がんばって。あなたの様に、聞こえなくても社会に出て頑張っている人がいるということは、多くの聴覚障害者・聞こえない人にとって希望なんですよ」と言われたんです。でも、

私以外の聴覚障害者・聞こえない人に会った事も無い。頑張れって言われても何を頑張ればよいのだろうと思ったんですね。「ああ、そうですか。」と言いながら、頑張れがんばれって、頑張ってもなあ...と。例えばお笑いの、ビートたけしの風雲たけし城とかいろいろおもしろい番組があったんですが、漫才師、特に早口で、大阪の口調でまくし立てられると、フランス語かなんか聞いている感じですよ。全く聞き取れない。それを聞くことが頑張ることになるのかなって思って、テレビにヘッドフォンを差し込んで一生懸命聞いたんです。あるいは、伴奏が低くて歌詞が聞き取りやすいような歌でも、聴くだけでは全部の歌詞はわからない。なので、歌を聴きながら歌詞を聞き取って紙に書いて、後で本当の歌詞と照らしあわせて、合ってるかどうか見たり。でも、どんなにがんばっても耳っていうのは良くならないのだということだけがわかりました。

私は盛岡出身で、仙台の方で就職したんですが、仙台では「だっちゃ」とか「だすべ」とか、独特のしゃべり方があるんですね。そうすると、聞き慣れないということもあって、輪を掛けて聞き取りにくかったですね。

職場では、耳をダンボにして耳学問しなさい、とよくいわれるわけですね。同僚とか、私より後にきた後輩達というのは、上司や先輩のやりとりを聞いたり、電話を聞いたり、いろんな耳学問をしながら仕事を覚えて新しい代理店との対応の仕方やトラブル処理の仕方などを自然に身につけていく。でも、そういったあたりまえのことが、自分にはできない、ということに気がついた。一年一年経つうちに、だんだん差がついていくような、そんな気持ちがふくらんできました。

会議とか研修会とかですね、人が増えたり、方向があちこちだったり、いろんな人が混じっていると、聞こえなくなっちゃうんですが、とにかく職場なので、将来給料下げられれば困るよな、変な所に飛ばされてもいやだしなと思うと、とにかくとにかくごまかすしかない。とにかくなんとかその場を取り繕うしかないんです。ただ、やっぱり心の中では、????????、そういう目で見られているんだろうなと思いながら、上司には時々「なんだお前、そんな情報も持ってないのか、そんなことも聞いてないのか」と言われ、そのようなことば一つ一つに傷つきながら、なんとか過ごしていました。

そして、そのとき以降、雑談にも加われず、結局、仕事で、電話はまだ何とかできたんですが、電話をしたり、誰か来客が来た場合には、走って行って案内はできる。そういうことでカバーしていたんですけども、雑談というのは、みんな席に座ったままパソコンとワープロを打ちながら、書類なんか書きながら、相手を見ないで会話をする。そういったものは、全然加われないのね。だから、最初のうちは声をかけてもらうわけですけど、やっぱりまともな返事が返ってこない、また、かっこつきたような返事が返ってきたり、あるいは無視しているような...で、そういうことでは、だんだん疎遠になっていくんですね。同じ係の人であればあるほど、同じ部屋の中の人であればあるほど人間関係というものがギクシャクしていきました。そして私はそういった相手に対して、誤解を与えたということにも気がつかないことも多かったようです。なんていう風にあとで教えてくれました。「村田君、君ちょっと耳聞こえないんだったら、言った方がいいんじゃない。みんななんか無視されてるって誤解してるみたいだよ」ということをですね、気づいた人が、一人か二人が言ってくれたんですね。そして、廊下とかですれ違った人たちだと割合すぐ近くで話ができますから、割合こう普通に仲良く話ができるんですね。なんで他の部屋の人と仲良く話をするのに、同じ係りの人、同じ部屋の人とは話をしないのか。なんか

性格異常者のような、また、二重人格のような、そういう受け止めかたをされていたようです。

そして、飲み会ってというのはとにかく辛いんですね。居酒屋ってというのは、普通の健聴者でもなかなか聞き取れない所なんでしょうけど、でも、健聴者同士が会話が成立している所というのは、まあそういう空間があってその中に入っている人だと誰でも聞こえるだろうというものです。そういった中で、全然会話についていけず、途中でみんなが笑っているんで、こっちもこっちで顔を見たら“ハハッ”と笑顔を作って、一生懸命黙々と食べて、そういうことで何とか早く2時間ぐらい過ぎてくれないかあと時計を見たりしながら時間を過ごして、それでカラオケも大っ嫌いでした。結局は仕事についてはもう、与えられたことさえできればいいやと、とにかくそんな特別なことができなくても、与えられた仕事が、それだけであればいいんだと、それくらいでしか自分は何もできなかったんですね。だから、昇進は要するに望めないでしょう。まあ公務員だからクビにもされないからいいということで、非常にアフターファイブに全力投球するというダメ社員というか、そういう風な社会人になってしまいました。とにかく、聞き取ろうとすれば神経が疲れます、ストレスがたまります。そして、周りの人とバリアを作って関わらないことで、自分を心の安定を図ろうとする。ちょうど中学校かその時の自分に、なんかやっぱりそこに戻っちゃうのかなあという気持ちです。

#### 4 手話との出会い ~疲れしないコミュニケーション~

でも、いろいろとあちこちに動き回るのは好きだったので、いろいろスポーツをやってみたり、演劇をやってみたりしたんです。演劇も、体で表現するのは好きだったんですけど、アマチュア劇団を自分で作ったりとかいろいろとやっていたんですけど、挫折しました。というのは、アドリブに対応できなかったんです。シナリオ通りに進んでいるのであれば、どの役者にも負けないという気持ちでがんばっていたんですけど、アドリブが入ると対応できなくなってしまいます。アドリブというのは、約束もなく入るからアドリブなんですね。いわゆる演劇の公演をやっているその本番に入るわけですよ。本番に聞こえないというのは、これはもう致命的だったので、これから私が芸能界に入ることはできない。どこに行き着いたかということ、たまたま友人に誘われた手話サークルというところに行くになりました。それはほんとにきっかけはささいなことだったんですが、その手話サークルで、本当に僕はカルチャーショックを受けました。「なんだ、聞こえない人ってこんなにいるんだ」と。その手話サークルというのは聾啞者、聾者が多かったんですけど、ほとんど聞こえない聾者、そして聞こえる健聴者も手話を使って話をしている。こんな神経をすり減らさない、ストレスのないコミュニケーション手段があったのかということが本当に驚きでした。なんでこんなの医者も両親も教えてくれなかったのかと。こんな三十も過ぎてから教えてもらったというか、これがもっと小さい頃から手話なんて使えてたら、自分の人生がもっと違うかもわからなかった。本当に耳を使った会話というのは、どんなに努力をしても上達することは、その努力が報われるってことはありません。でも、手話ってというのは、努力をすればするほど、自分の身になっていくってことがわかったので、それからというもの、またいろいろありましたから、毎日手話サークルに通うことができなくて、あちらこちらの手話サークルが終わった後も、ファミリーレストランでお茶会をやっているところに行って、新たないろんな手話を盗み見て、そしてテレビにビデオ、本、ありとあらゆる手段を使って、使い古されたことばでいうと、“乾いた砂地が水

を吸収する”ってようなことが起こるかなということでしょうか。わりと1年くらいで、まあそこそこ聾啞者と会話するくらいのレベルまでなりましたんで、ほぼ大丈夫、スムーズになりました。そうなってくると、居酒屋がもう楽しくて楽しくてしょうがない。どんなにうるさくても、そこにいる全員の話がわかる訳ですね。全員の話がわかるってこんなに楽しかったのかと。なんでこんなこと、自分は知らなかったのか。なんか人生の大事な大半の時間を損しちゃったような気がするんですね。お酒は全然強くなかったんですけど、とにかくもう毎晩でもいいやと飲み会は。週末はですね、毎晩毎晩と、国分町って東北一の歓楽街と言われている、歓楽街、飲み屋さん街が仙台にあるんですが、毎週そこで朝を迎えていました。とにかく誰かれ捕まえて「ようし、もう一軒、もう一軒」っていう感じで、とにかく手話を使って話すことが楽しくてしょうがない。本当にストレスのかからないことばがあったんだ、こんなコミュニケーション手段があったんだ、全員の話してるのが全部わかるってこんなに嬉しかったんだと。その当時ですね、ちょっと合宿があったんですね。“寝手話”ってご存知ですか。“寝言”って健聴者の場合ありますよね。ある聾啞者に「おまえな、努力しているのはわかるけど、寝手話が出るようになったら一人前だな。」と言われた。それが半年くらいで寝手話が出ました。それは友だちに「いやびっくりしたよおまえ、ゆうべ寝ているときに手話やってるんだよ」って言われて、「えーマジ、本当、やったー」ということですね。これで俺も一人前だーと思ったんですけど、そのくらい夢の中でも手話をやっていくくらい、はまったんですねこの頃。

そして、さっきのその日本手話というものと出会った訳ですが、手話っていうのはたぶんご存知かと思いますが聾啞者の使っている、昔からの日本語とは全く文法の異なった日本手話というもの、もう一つは、しゃべっていることばに手話をつけていく、対应手話というものもあります。それで、私は最初、日本手話でやったんですけど、その日本手話っていうのは、表情というのも言語の中の一部なんですね。だからまた、自分の意思をはっきりと表す。というのが、これが聾啞者の特徴であり、日本手話の特徴なんだと思います。二次的効果として自分で手話セラピーと書いたんですけど、中学高校時代ではあった無表情になってしまうということ。演劇をやる中で、少しずつそういったものが改善されてきたのかな、とすごく思います。手話をやることによって、ああそうか、“嬉しい時は嬉しいっていう表情を出していいのか”と“嫌って言う時には、嫌な表情をだしていいのか”ということ私を手話の学習と同時に、勉強しました。それまでは、とにかく周りに対して、自分自身が浮いた存在にならないように、目立たないように目立たないようにという、曖昧に曖昧にっていう風に三十何年生きてきました。手話っていうのはそれと全く正反対の生き方なんですね。自分の環境、意思をはっきりと表現する。そういう手話をやっていくというのが、もともとあった演劇的な素養と相まって、「おまえ手話はへたくそだけど表情は聾者並だ。」と言われるようになった。ある人は「おまえは手話がへたくそな分、表情でカバーをしているよな」とそういう風に言われるようになったんですが、自分の心が、コッチコチに固くなった心が日本手話と出会った事によって、やわらかく解きほぐされていったんですね。そしてもう一つは、その聾啞者という...ここ(スライド)に“ろう民族”って書いているんですけども、やっぱりほんとにその、日本人に見えないんです。私、国際交流もちょっとやっていたんですが、変な言い方をすると、中国人の集団のように、とにかくみんなが集まるともうゴチャゴチャゴチャってあっちこっちあっちこっち話が始まって、「集まれー」って言っても集まらないんです。とにかく話が終わらない。

会えば「おー久しぶり、久しぶりー」って、「ちょっといいか、ちょっといいか」が一時間、二時間になっていくっていう、そういうそのこんぜんとした、でもすごいエネルギーが溢れた“ろう民族”っていうことばを勝手に作ったんですね。そういう物怖じしない、はっきり物を言う、そしてマイペース、そういった聾者という存在がうらやましくてしょうがなかった。ああ、そんな生き方があったんだ、そんな人生もあったんだ、ということがほんとまぶしくてしょうがなかった。(スライド)ろう者伝説って書いてあるんですけど、健聴者と聾啞者って、捉え方ってけっこう違いますよね。手話を覚えた時にいくつか面白い話を聞いたんですけど、手話っていうのは自分の感情、意思をはっきりと表現します。ある聾啞者が新しく入った会社で、ある時「あー君、君、君、今日は申し訳ないんだけど、ちょっと残業いいかな？」って上司に言われた。それで、「えー」っていう表情を出したんだそうです。後で同僚に「だめだべあんだ、ああいう時は、“今日はちょっと都合が悪くて”とか、“申し訳ないんですが”って言う、そういう風に対応をするもんなんだよ」っていうふうに健聴者に教えられたんです。その聾啞者はこう思ったんです。『へー、健聴者って大変ね。』あーそういう考え方があるんだなって思いました。そんな生き方ができたら自分も幸せになれるかなあ。でも、ちょっと無理だわ。それはでも、ちょっと難しいかなあと思いましたが、でもなんかそういう話を聞くのが好きでした。もう一つは、私もその聞こえないっていうことを隠して生きてきた訳ですけど、手話サークルでは、私よりももっと聞こえない人がいっぱいいる訳です。なので、隠す必要はないんですね。なんですけど、やっぱりどこかその、長年の習慣といいますか、健聴者に対しては隠していた。特に言わなくていいんだったら言わない。ある時、聾者にはちょっと言ってみたんです。「実はな、俺ちょっと、ちょっと聞こえないんだ」って言ったんですね。そしたら同時に「おー、なんだ」あっさり「なんだ」で、なんだで終わっちゃう話なのかということなんですけど、「なんだ、んじゃ、おまえの耳に針刺してやっから、ろうになってこっちに来いよ」って言うわけです。健聴者、特に聞こえないお子さんを持つお母さんからすると、非常に乱暴なことばだと思えるかもしれないんですね。これが一般的な聾者が言ってくるジョーク、まあブラックユーモアなんですね。自分たちのいる聾啞者の世界に誇りを持っている。そういった世界に対して、私の場合には、まあそういう形で「おまえもろうになって仲間になれよ」っていう、そういうジョークを返してくれたりするんですけど、そういう聞こえなくて当たり前、聞こえなくてもいいんだ、聞こえなくても生きている、元気に生きている人たちがいるんだ、というこの世界というのは心地よかった。というのは、それまでの私が出会ったことのない心地よさ。なので、この私にとってストレスを解消してくれる大切な場所だった。この手話サークルというのはですね。時々、「村田さんって、聴力はそんなに重くない、軽い方なのにどうして手話を始められたんですか？そんなに手話がお上手なんですか？」って聞かれることがよくある。まあ、普段の仕事、生活の中では手話は一切使っていません。でも、手話を使うことによって自分の心が救われる、ほっとできる、そういう場所があったということが、自分自身にそれだけ手話にのめり込むきっかけになった。

## 5 難聴者との出会い ～障害受容のはじまり～

そしてその次に、仙台の聴覚に障害を持った親御さんと、その子どもたちが一緒にキャンプに行くと

いう、そういうのが一年に一回、親子ふれあい教室っていうのがあるんですね。それにボランティアで参加した時に、夜、子ども達が寝静まってからですね、別室で難聴の親御さんとボランティアさんと飲み会やるんです。その時に、難聴のお母さんに呼ばれたんですね。「ちょっと村田君村田君、あっちでちょっとお母さん達、話したいって。」って言われて、気軽に行きました。そしたら、そこにいたのが、難聴者のお母さん方。ぐるっと囲まれまして、「ちょっと村田君、聞いたわよ。何であんた、聞こえないこと黙ってたのよ。ちょっと聞こえないんだって。もっと早く言ってくれてたら、もっと色んなこと話してきたでしょ〜。」とかって言われたんですね。「いや〜、あ、そうっすか。」と。なんかその、意外だったんです。

それまでは聾者と聴者としかいない、ここにきて初めて難聴者と出会って、その方は手話はできるんですけども、喋りとか話で私に言ってくれてたんですが、あの、何ていうんですかね、難聴のお母さん達にまで隠そうっていう風に思ったわけではなかったんですが、それ位自分の中で『隠す』っていうことが身に染み付いていた。長い間、自分の心の奥底に、“誰にも触れられないように、隠していくんだ。”っていうものが、そのことばをかけてもらった時に、でてきたんですね。で、何か恥ずかしかったんですけども、30になった大の大人がですね、泣いちゃいまして、自分でも何で泣いているのかわからなかったんですけども、こんなに隠して隠して隠していたのに、その隠していることを聞かれて、何だか嬉しい。自分が隠し通そうとしてきたことに触れられて、何かすごく胸が…。そういう気持ちっていうものがあつたんだ、っていうことに、その時初めて気付きました。その時から、私と難聴の皆さんとの出会いっていうものが始まりました。

そして、自分を隠し続けてきた自分自身の心、どうして自分はこんなにまで隠さなければならなかったのか。どうしてこんなにまでして、人を拒絶しなければならなかったのか。どうして、こんなにも誤魔化さずにはできなかつたのか。その心をきちんと正面から向き合わなければならないということに気付きました。

## 6 変化するアイデンティティ ~聴覚障害者としてのリアリティ~

そして、アイデンティティがこの辺りからだんだん変化してきました。それまでは、健聴者としてのアイデンティティ、何か知らないけど健聴者の中でみそになっている。鬼ごっこなんかの時に小さい子どもが中に入れなくて…。鬼になっても鬼にならないで取りあえず遊ばせてくれる、仲間にはなっているんだけど、同等の権利を持っていない。それがみそなんですね。私たちの地域ではそう言うんです。健聴者なんだけど、健聴者じゃない。難聴者なんだけど、難聴者じゃない。でも、健聴者として生きるしかない。他の生き方を知らない。何も知らないという自分が、聾者と出会って、新しい世界を知って、聾者の世界、ま、聾文化ということばがありますが、聾文化ということばができるように、独特のアイデンティティが聾者の中ではあるとされている。すると難聴者のアイデンティティって何だかよくわかりませんが、聾でもなく、健聴でもない、そういう難聴者としての個性、アイデンティティという何かに、自分自身の気持ちが次第に向っていくのが、わかるようになりました。それ以前はもう、聾になろうと思いました。こんな自分でも聾者になりたい。聾者の世界で生きたい。けれども、やっぱり自分は聾者にはなりきれない。健聴者として育ってきて、健聴者の文化をしっかりと体に身につけて、

そして、結構話ができ、音声聞き取って…。そういった自分自身のアイデンティティがどこに向かっていくか。

当時、宮城県の手話サークルの連絡協議会にいて、災害の取り組みを始めていました。その中で、災害ML、災害の際の聴覚障害者に対する情報提供とか、そういった色々な活動をしていく中で、色々な所から取材を受ける機会が増えてきました。その中で、1年、2年、3年っていう風に活動を続けていくと、やはり健聴者、今まで一緒にやってきた手話サークルの健聴者の仲間と自分とも何か違うらしい。何かモチベーションが違う。そう、リアリティが違った、ということに気が付いたんです。広報車が色々な給水情報とかですね、色々な災害の情報を消防車とかがスピーカーで叫びながら回っていく、そういったものとか、駅のホームや施設なんかのスピーカーの音がきちんと聞き取れない自分自身というのは、やはり聴覚障害者なのかな…っていう気持ちです。身体障害者手帳の交付は受けられないので、法的には私は健聴者です。でも、災害の対策に取り組めば取り組むほど、やっぱり自分って聴覚障害者なのではないか、っていう思うようになったんですね。そうこうしているうちに聴力がだんだん低下してきました、アナログ補聴器2個はもうだめだったんですが、今は、良かった方の耳にデジタル補聴器を入れて使っています。それで、やっぱり自分は聴覚障害者なんだな、というわけなんです。

そして、災害対策が社会に広がっていくうちに、色々なところから取材に来るわけです。で、取材に来るたびにですね、時々その、不意に「あなたは聴覚障害者ですか？」という風に記者から質問をされました。ある日そう聞かれて「軽度なんですけど、ちょっと聞こえません」。別れた後に何か急に気になってですね、記者に電話をして「すみません、さっきのことって、新聞に載っちゃうんですか？」って尋ねてしまったんです。「何かまずいんですか？」って聞かれて、「ちょっと2・3日考えさせてもらっていいですか？」やっぱりなんかその、新聞紙上で自分が聴覚に障害を持っているということが公になってしまうのか、と思っただけですね、なんかすごいプレッシャーがきたんですね。これから世間に、職場に知られてしまう日がついに来るんだというのがすごい突然プレッシャーになってふりかかってきました。

2・3日悩みまして、悩んで悩んで悩んで結局結論が出なくてですね、地元の仙台の重度の難聴者に相談したんです。明日は回答しなければならないっていうのもありまして、夜10時位にメールしまして、「いや～、実はこれこれこうです。明日、俺がちょっと聞こえにくいっていうことを、新聞に載けるかどうか決めなきゃなんないんだ。」まー、何でこんな程度を悩むのかなという風に皆さん思うのかも知れませんが、私にとってはそんなことだけれども、天と地がひっくり返る一大事だったんです。そしたら、しばらく考えていた友人が、こう言いました。「(そろそろいいんじゃないか?)」(手話で表現) そうだな、そろそろいいか。って何かそんな気持ちになれて。何かこう、ことばでもなく、理論でもなく、その時その瞬間が来ないと自分の心が「うん」と言わない、ってあるのかもしれないね。

手話も他の聴覚障害者のことも何にも知らないでいた自分自身が、わずか数年の間で、手話と出会い、聾者と出会い、難聴者と出会い、色々なことを知って、今は手話を通じて大勢の方と話しができる。そういう自分があって、そろそろいいかなっていう気持ちになったのかな。そういう自分自身のことを、

追い立てるのでもなく、せかすのでもなく、黙ってその時が来るのを待っていてくれた記者さんだったということが、自分にとって本当に恵まれた出会いだったと思います。

職場でどんな反応をするのかな、とかって思いながらですね、新聞記事を読んでいました。それがこちらです。(スライド)

“手話サークルの活動をしている私なんですが、私自身も障害があります。日常会話に支障はありませんが、音が交錯する場では声が聞き取りにくくなります。聴覚障害者の孤独感を解消すること、それがねらいです。”と書いてあります。これ、2時間くらい1人の記者に講演したんですね。「もうちょっと聞かせてよ。」とか言って、2時間くらい1人で喋ったんですけど。それが、たったこれだけ。でも、確かに一番最後に、自分が一番伝えたかった部分で本当は一番伝えたくなかった部分を合わせて一番最後に出たかな、ってことです。地元では一番メジャーな新聞で、ほとんど誰もが取っている一番メジャーな新聞なんですが、職場でもかなりの人数の方が読んだようで、しかし、しばらく誰も何も言ってこないで、怖かったんですけども、そのうち、毎日顔を合わせている人は何も言わないんですね、逆に遠くの人から言われまして。「おー、村田君村田君、見たよ。頑張ってるね。」なんて、こんな感じで、これだけ。何だこれだけかって。何かこう、知られる事ってものすごく大変な事だって、夢の中の怪物のような感じでいたんですが、いざ出してみたら、何かこんなもんかっていう感じですね。拍子抜けしたっていう感じの、ホッとしたっていうか。何か犯罪者ではないですけども、自分が悪さしたのを言っちゃった、スッキリしたみたいなの、何かそういうホッとする感じがありました。

## 7 理解ある上司との出会い ~「隠しつづけた心」の開放~

それから程なくして、人事異動になりまして、そこでまた、かつて出会ったことのない上司、本当にこう、今まで、あ、今でも目の前にいるのですが、本当に感謝してもし尽くせないなあっていう方に、出会うことになりました。今までは、自分自身が触れないでくれ、聞かないでくれっていう感じだったからなのかどうかわかりませんが、私の耳のことについて触れてくる方っていうのはほとんどいませんでした。ところが、この上司っていうのがですね、話す時必ず私の側に寄って来るんですね。「あー、村田君、右いいんだっけ？左いいんだっけ？どっちだ？あ、こっちだ。」とかですね、「俺の声、聞こえてるか？大丈夫か？」っていう風に、気さくに声かけてくれる上司でした。最初の時は、「しーっ」っていう感じで、「声大きい声大きい、聞こえる聞こえる」という感じだったんですけど、何回も毎日毎日何回も何回も言われてるうちに慣れちゃって。ちょっとした数人の会議っていうか、打ち合わせする時にも、「村田君、こっちいいんだっけ？お前こっち来い。お前そっち座れ」とかってやってくれるので、何かすごい助かっちゃったかなっていう感じがありましたね。本当に、あんなに触れられなくなかったんだけど、何かすごい嬉しいっていう気持ちになりましたね。本当に、一つひとつの積み重ねだったと思うんですが。「あ、嬉しい。この上司好き。」みたいな、そんな感じになりましたね。

そして、人事異動して1ヶ月半くらいたったんでしょかね、歡送迎会が開かれました。2週間？3週間...、ちょっとして歡送迎会がありまして。その頃、新聞にも載ったしな~、やっぱり最初が肝心かなという思いがあって、一番最初にその職場に行った時には言いそびれたので、この歡送迎会の時に一言ぐらい、今度こそ、よし、絶対言うぞ、絶対言うぞ。ファイト！という感じですね、気合を入れて

気合を入れて、こんなに気合を入れて臨んだ飲み会っていうのは、なかったんですが、気合を入れて飲み会に行ってきました。で、自己紹介をした時に、照れくさかったので「いや～、最近ちょっと年取ったせいか、耳が遠くなってきて、色々ご面倒ご迷惑おかけするかもしれませんが、よろしくお願ひします。」なんて落語家の挨拶みたいなんです、さらっと言ってしまったんです。一応公式な場で、自分が聞こえないということを皆さんにお伝えした、私の記念すべき第1回が、この時なんです。そしたら、奥の方に座っていた上司がですね、下を、若干斜め下を見ながら私の話を聞いていたんですが、最後、私のことばを聞いて小さく2・3回頷いてくれたんです。何かそういうのを見た瞬間、涙が出そうになって。何で、飲み会の一言の挨拶で、自分が送別されるわけでもないのに、泣かなきゃいけないんだって思いましたけど。あ～、この職場に来てよかったなっていう気持ちを、こういう職場っていうのは、ありがたいですね。本当にこう、自分が努力をして作り上げた環境でもない、自分が努力をして得た状況でもないんでね。本当に、威張れるものでも何でもありませんが、でも、これだけ、ひん曲がって、面倒くさい、自分だったら友だちにしたくないような自分のことを、そういう僕の心をほぐしてくれて、受け入れてくれる職場だったり、そういう皆さんに恵まれたんだなっていうことを感じました。

そして、その後ですね、やっぱり補聴器が必要だと思って、アナログ補聴器2個捨てましたが、新しいデジタル補聴器というのがあるということを手話サークルで聞いてきましたので、早速、医者に行って、そして、補聴器屋さんに行って、デジタル補聴器、36万円！買いました。ボーナス、それではなくなりましたが。で、買いました。でもですね、その頃私、髪、これ位長かったんですよ。(耳の下辺り)補聴器が見えないように。これ結構、難聴者には多いんですね。聾啞者の人は気にしない人がほとんどなんですけども。難聴の、特に、軽度になればなる程、軽くなればなる程、男性もですね、女性も、髪で補聴器を隠す人っているじゃないですか。私も何かこう、髪を伸ばしてですね、吉田拓郎じゃないですけど、結婚するわけじゃないですけど。ギャグが古いですね。髪を伸ばして、補聴器が見えないようにしてました。なんです、一つひとつゆっくりゆっくり階段を上がって行って、ま～、ここまで来たからいいかなって、そういう気持ちで、補聴器を買って1ヵ月考えて、髪を切りました。そして、補聴器が見える状態にして、今ではちょっと聞こえない時、えっ？て補聴器を見せたりします。「えっ、何だって？」って。一応、そういうアピールができるようになって、やっと、自分で自分のことを許すっていうんでしょうか、隠していた心が解き放たれていったなあって。

そして、その後ですね、こんな私でも係長に昇進しまして、部下というものが一気に3人できまして、ちょっと離れた部屋も合わせると全部で7人の部下がいるのですが、まあ、部下の教育というか部下の状況を把握するっていうのがこれまた耳を使う仕事なんです。部下同士がぐちゃぐちゃとやりとりをしている。あるいは部下同士が何やら相談をしている。部下が何やら深刻な顔で電話をしている。っていうと、普通の係長さんは呼ばれもしないのに、「どうした？」「いや、それは違う」ってですねアドバイスを適切なタイミングでするわけです。それができないわけですね。まあ何回か、「ああ～村田君、係長としてはまだまだ失格だな。」って言われながらですね、はあ～。でも、先ほどの上司がやっぱりフォローしてくれまして、「村田君、部下にちゃんと耳のこと伝えたか？」って言うふうに声をかけてく

れまして、「ああ、このまえちょっと言いましたぁ～。こっちの二人にも言おうかなと思っているんですけど。」っていう感じで、ぽっと、肩を軽くね、押していただきました。そうこうしてるうちに、同じ島って言うか机を並べた部下、部下二人がですね、ちょっと遠くから私に話しかけてきた人や上司がいるときに、オウム返しに要約して教えてくれたりとか、呼ばれた時に肩をたたいたり、向こうだよと教えてくれたりとか、そういった協力が、少しずつ少しずつ、広がっていくようになりました。

で、そのころもう一人、私は大学の方に勤めているのですが、同じ大学に重度の聴覚障害者が教員でいまして、二人で学内手話普及計画、手話普及プロジェクトと名をうって二人で手話で会話をして至る所を歩き回って手話を見せつけようというプロジェクトです。聴覚障害学生に対して手話のサポートをしたりですね、要約筆記のサポートを受けさせるために、昼休みに学内の課長とかがいるときを見計らって、手話で会話をしながら前を横切ってみたり。いろんなことを時と場合によって。私自身が聞こえる環境であれば、彼のための手話通訳。去年学長選挙があったんですが、学長選挙の会場がわかって、スピーカーを使ってバンバン聞き取れるというのがわかって、学長選挙をやっている最中に席の一番前に陣取って、私が手話通訳をやって、『ここに聞こえない人いますよ』って PR したんですね。で、そういったことが段々、段々、自分としてもできるようになってきたんですね。

そして、去年はその総合防災訓練で、私が職場での災害担当だったんですが、初めて要援護者としての障害学生の支援っていうのを計画しまして、自分自身の経験や体験を、交えながら皆さんに、聴覚障害者っていうのがうちの大学に4名いましたんで、そういったことの説明をしながら、あるいは共通理解をしながら、あるいは...、協力しながら、そういう仕事もさしていただきたいと思いました。

今こうして振り返ってみますと、本当に聞こえないことが辛かったんですけど、でも一番は聞こえない自分自身を受け入れられなかった、自分が聞こえない、ちょっと聞こえにくいということを受け取りきれなかった。認められなかった。そして、誤魔化して、周囲に隠して、そうやって生きてきた、そのことが一番辛かったですね。聞こえないことそのものよりも、誤魔化して、隠して生きることが一番苦しかったですね。ようやく、気づくことができました。気づくことができたというか、そういう部分で、自分自身の見直しができました。私自身、そうか、これまでの歩みっていうのは以上のような流れなんですけど、本当にその～こんな自分ですから、聴力が重いヘビーな障害でもないのに、いや～こんな話していいのかなぁ？っていうのもあるんですよ。でも、聴力が軽くても、結構傷ついていた人間がいるっていうことに気づいていただいたら嬉しいなと思います。

確か、WHOの基準で言うと、昔はデシベルが基準だったんですけど、今は、社会参加の交換性っていうのが取り上げられているんですよ。社会参加の交換性っていうのは、例え聴力のデシベルが高くても、完全に聞こえなければそれは100聞かなかったことと同じになるということをみんなに知ってもらいたい。7割、8割、あるいは9割聞こえていたとしてもそれが特に仕事っていう自分が責任を持たなければならない事態に陥った時には、もうそれは100か0の世界です。だから、聴覚の障害、デシベルが軽くて障害が軽いように見えても、非常にその社会参加の交換性というものには、健聴者の方から見ると非常に不利なものなんだということを一人でも多くの方に気づいていただけたらなと思っています。そして自分自身は、自分自身の場合は、まあ何かに対してイジイジイジイジ考え込んでしまいうタイプなので、原因とか、どうして？なぜに？っていう疑問追求というのがすごく多かったですね。

だから一つできなければ、やれない、どうして？っていうのが非常に強かったのですが、自分自身の心がわかっていったときに、単に、こう、じわぁ～と出てきた感情だけではその感情を誤魔化してきた背景、自分の心のホントの叫び、自分の自分から出てる心の根っこの部分、今まできいて来なかった自分自身の叫び声、そういったものに耳を傾けて、自分の心を知っていったんですね。私の場合は心が少しずつ楽になりました。そして、たまたま、たまたま私の場合には職場でも友人でも非常に恵まれた、ま、環境と言うか場をいただきました。でも、そうでない方もたくさんいらっしゃると思います。

以上これで少し早いですが終わらせていただきます。つたない話ですみません。ありがとうございました。